

## 二松の陽明研と私

松川健二

二松学舎大学陽明学研究所の存在を私が強く意識したのは、一九九〇平成二年のことであった。まだ北大に在職していたこの年の六月十一日付、所長の洪樵榕先生、主事の足田啓佑先生連名の、次のような執筆依頼状を頂戴したのである。突然このようなお手紙をさしあげることをお許しください。

当、二松学舎大学陽明学研究所では、機関誌『陽明学』を平成元年に創刊致し、本年三月には第二号（中江藤樹特集号）を刊行致しました。続いて第三号を刊行するに当たり、編集会議で検討いたしましたところ、先生に玉稿をお寄せいただくことをお願いするようになりました。

以下、省略するが、要領としては、1、テーマ、陽明学に関する論考。2、枚数、400字、40枚。3、締切、八月末日。4、原稿料、400字1枚千五百円、等とあり、

なお第三号は、佐藤一斎の特集で、本学の教員以外に外部の先生四名の方に原稿を依頼しております。お引き受けいただけるか否かは同封のハガキでお知らせいただきたくお願い申し上げます。

と、丁寧に結ばれているものであった。さらに足田先生の筆蹟で追伸も添えられており、恐縮した次第、長々と依頼状を引用したのは、二松『陽明学』草創期の実情の一端にも触れ得ると思ったからである。

当時、『論語』の解釈史に没頭していた私としては、比較的短期間で書けるものは、矢張『論語』周辺のものというこ  
とであり、「テーマは未定ですが、いずれ陽明門下における『論語』の扱い方に関する考察となろうと存じます」という  
文言とともに受諾させていただいた。往時の手控えを目にし、ただ懐かしい。

一九九五平成七年三月、北大を停年退官、四月、伊藤漱平先生との御縁で図らずも二松に職を奉ずることとなった。当  
時、陽明研の所長は中田勝先生。機関紙『陽明学』の特集ということで言えば、第四号、三島中洲、第五号、錢徳洪、第  
六号、熊沢蕃山、第七号、吉田松陰と、順調に発刊されており、翌一九九六平成八年三月発刊予定の『陽明学』第八号は、  
山田済齋特集号とのこと、着任早々の私の為には「詩文にみる山田済齋の風格」というお題が用意されていた。山田済齋  
といえば、さすがに岩波文庫の『伝習録』・『西郷南洲遺訓』等で知っていたから勝手もわかり、東京での初めての夏休  
みを、この論稿作成のために費やしたことを鮮明に覚えている。

一九九六平成八年四月、定年御退休の中田先生のおと、陽明研の所長を命ぜられた。引き続き機関誌の「特集」という  
ことと言えば、従来、錢徳洪（第五号）を除いてすべて邦儒（因みに創刊号は山田方谷）であることに着目、これからは  
日本と中国の陽明学者を交互に特集することとした。ただし次の第九号は準備の都合もあり、取り敢えず研究者の豊富な  
西郷南洲を選んだ。隣居の東洋学研究所長、中村義先生の御助言を頂戴したと記憶する。以降、第十号、王龍溪、第十一  
号、池田草庵、第十二号、李卓吾、第十三号、東沢瀉、第十四号、劉念台、と、学の内外、国の内外の研究者の協力を得

て、曲りなりにも刊行を続け得、二〇〇二平成一四年三月、定年を迎えることのできたことは感謝に堪えない。研究所のスタッフとしての、顧問、主事、運営委員の各位については、年度によって出入もあり、ここに一一お名前を掲げることが省くが、とりわけて福岡女子大学の足田先生には、終始、「陽明学関係書、紹介と短評」欄、及び、「陽明学だより」欄を御担当いただいたことは銘記したい。

さかのぼって、陽明研は一九七八昭和五三年四月、百周年第一記念館に開設された。

その創設の趣旨を語るべく、好個の資料の一つとして、二松『陽明学』創刊号巻頭に載る小池良雄理事長の「『陽明学』発刊のことば」を取りあげてみよう。

小池理事長は、まず二松学舎の創立者三島中洲の師承関係、つまり遡っては佐藤一斎・山田方谷、下つては山田済齋という「陽明学」の継承に言及、「今や陽明学はわが二松学舎の伝統と言つても過言ではあるまい」とする。次いで「分析的で西洋的な朱子学よりも、道徳的で心の修行を重んじ、あっさりした東洋的な陽明学」が日本人の性向に合致するとし、敗戦から見事に復興を遂げ得たのも、「日本民族の良知と勤勉を心の底から発揮し」た結果に外ならぬとして、「陽明学」の有効性を力説し、次いで以下のように述べる。

本学は創立百周年を期して陽明学に関する総合研究を行い、わが国精神文化の発展に寄与する目的で陽明学研究所を創設した。陽明学思想の啓蒙をはかり、資料蒐集の外「陽明学講話」「陽明学十講」「伝習録新講」などの著書を発表して来た。

今この「陽明学」創刊号発行にあたり、本書が引き続き日本の社会及び学界に寄与されんことを念願する次第である。

如上の研究所設置の趣旨は、「陽明学を中心とし、日本儒学に関する研究を行う」という「陽明学研究所規程」とももとより合致する。この陽明学研究所の所謂陽明学とは主に日本陽明学を指すものと思われる。そうであるにも関わらず、先述の通り機関誌『陽明学』の特集対象を陽明門下に大幅に広げる編集方針を採るようになったのは何故か。

これは一般論であるが、ある思想体系の継承・展開の特徴を具体的に把握するためには近似する他者のそれと比較することで一層明確になることは言うまでもない。中国における陽明門下の人々の多彩な思想展開が、その後中国に在って如何なる態様を現出したかという問題は、日本における陽明思想の受容とその吸収・活用の実態の特質解明のために有効な視点であるに相違ない。要するに所謂「陽明学」を本邦にのみ狭窄せず、巨視的に目配りするなかで、日本陽明学の実相は明らかならなければならないと考えたのである。

例えば「経伝」の扱い方一つとっても、彼此もとよりさまざまであるが、いま一例を挙げてみよう。

熊沢蕃山『集義和書』中の次の問答。(二松『陽明学』第六号、九九頁所見)

朋友問云、江西の学によって、天下皆道の行はると云ふ事をしれり。儒仏共に目を付けかへたるは大なる功也。

答云、尤、少しは益もあるべけれども、害もまたおほし。しかと経伝をも弁へず、道の大意をもしらで、管見を是とし、異見を立て聖学といひ、愚人をみちびく者出来ぬ。江西以前には此弊なかりし也。……

蕃山にとつては江西の学、即ち中江藤樹の後学、例えば淵岡山の如き人人のなかには、容認できぬ者がいる、という。その根拠は一言で表せば「しかと経伝をも弁へず」に在り、と言えよう。「学」である以上、「経伝」を弁えてなされるのが本筋とする蕃山の立場はその限りでは首肯できる。しかし思想運動としての藤樹学派の以降の展開を評価するにはまた異った判断基準が提供されねばなるまい。ここで思い出されるのが陽明門下の旗手の一人、泰州学派の王心齋の言である。

経は道を載する所以にして、伝は経を釈する所以なり。経既に明らかなれば、伝復びは用ひず。道既に明らかなれば、経何ぞ必ずしも用ひんや。経伝の間は吾が心を印証するのみ。（王文貞公全集、二）

このような陸王の学に見られる「経伝」の権威についての常套的言辭も背景に意識しつつ蕃山なり藤樹学派なりを扱うことが、大きく言えば日本陽明学研究を豊かにする一つの方法と思われたのである。

都合三期六年、陽明研を預ったなかで、資料の蒐集といえ、宋代・明代の思想資料に重点を置いた。乏しい筆者架蔵の複写資料もその殆どを再複写、製本して備えるようにした。すべては、前述の通り中国近世思想にも相応の配慮が必要と思つたからである。

また研究所に出入する人達のなかから輪読会開催の話が持ちあがつた一九九七年、テキストとして顧憲成『小心齋劄記』を勧めたのも、全く同じ理由からであった。この「二松学舎大学陽明学研究所輪読会」は、中根公雄氏・渡辺賢氏を中心に引続き開かれ、二〇〇五年、「二松学舎大学宋明資料輪読会」と改称して今に到っており、その勉強の成果は二松『陽明学』一四号以降の各号に載る。

ひるがえって、二松に職を奉じた当初、山田済斎について拙文を物したことがあることは既に述べたが、不案内の分野ではあり、相応の時間を費したことは、逆に言えば、従来中国近世思想そのものを研究対象とするばかりで、日本儒学関係のものは、わずかに『論語』解釈史関連のものに限られ、他は殆んど視野に入れて来なかつたことの反映でもある。従つて、立場上、三島中洲を中心的に扱わねばならぬ時期があつたが、その理気説・義利説の実相に理解が至るためには、予想外の時間を要した。中洲自撰の碑銘に、自らを「孔学を奉じ、古今の諸家を折衷し、最も姚江を好む」と自己申告す

る場面があるが、中洲のいわゆる「陽明学」は、私の既成の「陽明学」に比して距りが大きく、かなりの難物であった。退休まで一年を残して、斎藤喜代子先生のあとを承け、東洋学研究所をも預ることとなり、その東洋研主催の、いわゆる「最終講義」で私は「中洲の思想詩」を扱ったのであったが、今にして思えばその頃になってようやく中洲の「陽明学」が見えてきたのであった。

退休后、やがて六年になろうとしている。その後、在職中に始めた「三島中洲研究会」は、その中心に人を得て順調に育ち、同慶の至りというところであるが、どのみち学祖三島中洲の学問の特質と、その周辺の諸事情は明らかにされ続けなければならぬわけであり、その営みの中で実現が期待される一つに「三島中洲全集」の編纂・刊行のことがある。その思いを共有する人は尠くなからう。

以上、二松『陽明学』の編集委員会の依頼に応じ、往時を回想してみた。『論語』・『中庸』に謂うところの「故きを温め<sup>あた</sup>てみたのである。温<sup>な</sup>ねてみたのではない。陽明は言う。

温故知新は、朱子も亦温故を以て之を尊徳性に属せり。徳性豈以て外に求む可けんや。惟だ夫れ新しきを知るは必ず故きを温<sup>あた</sup>むるに由る。而して故きを温むるは乃ち新しきを知る所以なれば、即ち亦以て知行の両節に非ざるを験す可し。(伝習録、中、答人論学書、十一)

この境地には到底及ばぬにしても、来し方を反芻することは、同時に未来への展望を開くことでありたいものである。

(〇七、一一、二四)

(二松學舎大学客員教授)